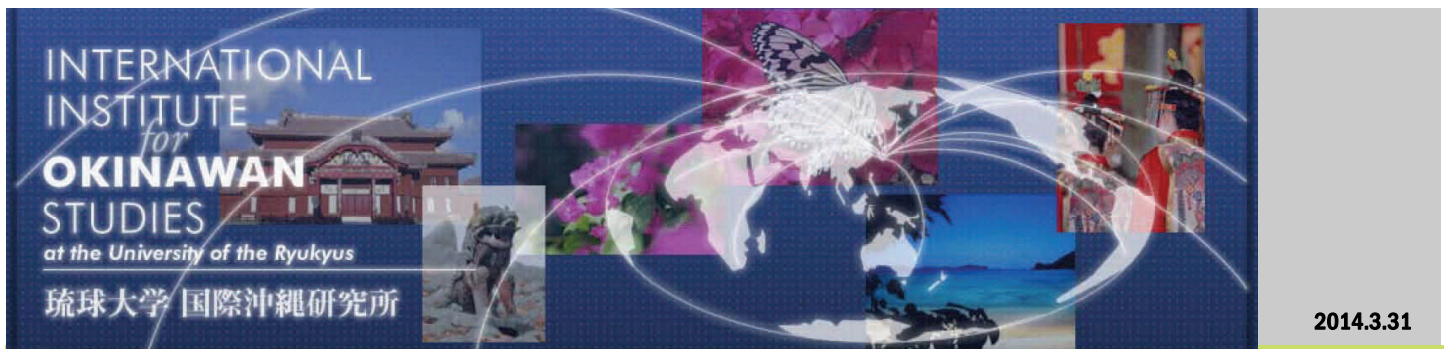




# Annual Report F.Y. 2013 International Institute for Okinawan Studies

## 2013年度 国際沖縄研究所 所報

### 2013年度『所報』発行によせて

国際沖縄研究所所長 藤田陽子

#### 目次:

|                       |   |
|-----------------------|---|
| 活動概要                  | 1 |
| 新しい島嶼学                | 2 |
| 沖縄ジェンダー学              | 3 |
| 2013年度中期計画達成          | 4 |
| 危機言語研究PJ<br>2013年度出版物 | 5 |
| 組織図                   | 7 |
| 研究所規則および規定            | 8 |

国際沖縄研究所は琉球大学における人文・社会科学研究の拠点であると同時に、他分野をも巻き込んだ学際的・先端的研究の推進役を担っています。様々な分野の研究者が培ってきた専門的知見や研究方法を踏まえ、それらを融合させることによってアカデミックな“化学反応”を促し、そこから新たな発見を生み出す—そのような場となることを目指し、多彩な研究プロジェクトを推進しています。今、沖縄をはじめとする地域社会の構造はより複雑化・重層化しており、多角的かつ多層的なアプローチを経ることなしに問題解決を図ることはできません。また、互いに共通点と相違点を持った他地域に学ぶという比較地域研究の重要性も再認識されています。国際沖縄研究所はこうした視点に立ち、沖縄研究にとどまることなく、しかし沖縄にしっかりと軸足を置きながら、コンパスのようにもう一方の足を世界各地に伸ばし、両者をつなぐ課題について探求し、その成果を発信し続けています。

本年度は2件の中核的研究プロジェクトから各1冊の書籍を出版し、学内外の優れた研究者や専門家による国際性と学際性に富んだ研究の成果を世に送り出すことができました。そしてこれらは新たな叢書出版事業「国際沖縄研究所ライブラリ」のスタートを飾りました。また、文理融合型琉球・沖縄研究や危機言語研究事業にも精力的に取り組んでいます。沖縄と世界を結ぶ「知の津梁」を体现する研究機関として、国際沖縄研究所はこれからも知的資源を蓄積し続けていきます。

### 2013年度活動概要

平成23年度にスタートした2件の文部科学省特別経費プロジェクト「新しい島嶼学の創造—日本と東アジア・オセアニア圏を結ぶ基点としての琉球弧」「沖縄におけるジェンダー学の理論化と学術的実践—沖縄ジェンダー学の創出」は3年目を終え、それまでの研究成果を総括した「国際沖縄研究所ライブラリ」を創設し、両プロジェクトとも1巻目の書籍を刊行した。

また、本学中期目標・中期計画達成プロジェクト経費による研究も同じく3年目を迎え、本年度は「琉球・沖縄学における先端的研究領域の開拓—文理融合型研究を旨とした実践的研究プロジェクト」をテーマとして、これまでの研究をさらに深化させた。

さらに、文化庁からの委託調査として、「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究」も行い、研究成果をシンポジウムにおいて報告したほか、報告書も発行した。

これらの研究事業のもとで、IIOSレクチャーシリーズを2回、シンポジウム・ワークショップを3回、国際シンポジウム・ワークショップを4回実施し、それぞれの事業目標に向かって活発な研究活動を展開した。年度末には、各事業の成果物としての年次報告書を作



2013年度に国際沖縄研究所が発行した書籍類

成し、プロジェクトに関わる国内外の研究者や関係各機関に配布した。

また、国際ジャーナル *International Journal of Okinawan Studies* のvol.7およびvol.8を刊行するとともに、紀要「国際琉球沖縄論集」第3巻を3月に刊行した。

## 「新しい島嶼学の創造」 問題解決型・方策提案型研究 を目指して

### 「超領域フレーム」と島嶼圏の新たな位置づけ

昨年度までは、「琉球・沖縄比較研究」および「文化・環境・社会融合研究」に重点を置いて研究活動を展開してきたが、本年度からは「超領域研究フレーム」による研究にも着手し、島嶼と大陸・本土との関係について検討するとともに、グローバル社会における島嶼圏の新たな位置づけを模索することを目的として、下記のテーマに関する研究活動を展開した。

○アジア太平洋地域の海洋政策

○世界の安全保障における島嶼の位置づけ



国際シンポジウム「島と海」の様子

### 島嶼地域の持続的発展に向けて

本事業は、沖縄および沖縄と関連の深い太平洋島嶼地域の持続的発展について、「琉球・沖縄比較研究」「文化・環境・社会融合研究」「超領域研究」の3つの研究フレームの下で学際的研究を展開してきた。平成23年度、24年度に続き平成25年度も、シンポジウムやワークショップといった研究集会に国内外の島嶼関連分野の研究者を招き、沖縄の研究者との間で島嶼地域に共通する重要課題について活発な議論が行われた。



国際ワークショップ「2つのシナ海を巡る安全保障」の様子

### 成果一 議論に基づいた最新の知見

本年度は2回の研究集会を通して、現代の島嶼地域が抱える様々な問題や課題、そして問題解決に向けた最新の知見を得ることができた。

たとえば、国連海洋法条約の下での日本、米国、オーストラリアなど先進国の海洋政策、ミクロネシアの小島嶼国パラオ共和国の排他的経済水域における戦略的な資源管理、また島嶼地域と世界とを結ぶ情報ネットワーク政策が大国・島嶼国それぞれの必要性に基づいてどのように発展してきたかという現代的な課題、さらに琉球王国時代の人々が広大な海をダイナミックに活用して大陸や日本との関係を構築していた歴史といった多様な報告をもとに、大海に浮かぶ島の存在意義や新しい役割について多角的な議論を交わし、「新しい島嶼学」が目指すべき方向性について多くの示唆を得ることができた。

また、米国、中国、台湾、韓国、日本そして沖縄の国際関係研究者が、東シナ海・南シナ海を巡る昨今の不安定な情勢や、安全保障を巡る国際関係の現状から展望について、それぞれの立場からの見解を披露し、活発な議論を交わした。国や地域による立場の違いが議論に反映される一方で、すべての参加者が相互理解を目指した対話の重要性について言及するなど、関係各国・各地域の専門家が直接に意見を交わす機会としての研究集会の意義が確認できたことは、「新しい島嶼学の創造」に向けた本年度の大きな成果であった。

### 研究成果を総括した書籍の出版

3年目を迎えた本年度は、事業前半の研究成果を総括し社会に発信することを目的として、書籍『島嶼地域の新たな展望 自然・文化・社会の融合体としての島々』（藤田陽子・渡久地健・かりまたしげひさ編著、九州大学出版会）を上梓した。これまでに様々な形で本事業に関わっていただいた方々を含む18名の研究者に、島嶼地域に関する多様なテーマについて執筆していただいた。

編集方針の特徴は、島嶼の現状を追認するとどまらず、具体的な問題解決策や提案を含む論考を集めた点にある。現状追認にとどまらない問題解決型・方策提案型研究を目指す「新しい島嶼学」の道筋を開く1冊となった。

|      |                                               |
|------|-----------------------------------------------|
| 序章   | 「新しい」島嶼学—過去を振り返り、未来を見据える                      |
| 第1部  | 環境・文化・社会の融合体としての島嶼                            |
| 第1章  | 島嶼社会の可能性と生物・文化多様性                             |
| 第2章  | ブーゲンビノール島（バブアニューギニア）の言語文化多様性—その次世代継承に向けての取り組み |
| 第3章  | 島おこしと観光—「観光地」と「生活空間」の同立は可能か—                  |
| 第4章  | ハワイにおける再生可能エネルギーの政策展開                         |
| 第5章  | 太平洋島嶼の漁村における海洋管理責任と女性の役割—原点からの再考—             |
| 第6章  | 太平洋島嶼における地域主体型の漁業管理とその意義                      |
| 第7章  | パラオにおける自然共生型地域計画                              |
| 第2部  | 琉球・沖縄からの発信                                    |
| 第8章  | 戦後沖縄における食料・栄養と食環境の変遷                          |
| 第9章  | 沖縄におけるソーシャル・キャピタルと徳義                          |
| 第10章 | 離島における教育の情報化と広域連携の効用                          |
| 第11章 | 島嶼地域における環境と社会インフラ                             |
| 第12章 | 消滅危機言語の教育可能性を考える—多様な琉球諸語は継承できるか—              |
| 第13章 | 奄美・沖縄のサンゴ礁漁業文化—漁場知識を心につけて—                    |
| 第14章 | 沖縄から島嶼地域の海岸防災を考える                             |
| 第15章 | 離島の地理的特性が地方団体の経営効率性に与える影響                     |
| 第16章 | 沖縄および太平洋島嶼の水利用と水源管理                           |
| 終章   | 自然・文化・社会の融合体としての島嶼地域と「新しい島嶼学」の展望              |



## 「沖縄ジェンダー学の創出」 講演等を通して生まれる 活発な議論

### 『沖縄ジェンダー学・第1巻』刊行

本年度は、国際沖縄研究所ライブラリとして、大月書店より『沖縄ジェンダー学・第1巻、「伝統」へのアプローチ』を刊行した。「沖縄ジェンダー学の創出」プロジェクトの平成23年度と24年度の重点テーマだった、沖縄におけるジェンダーと「伝統」や「表象」に関する成果の中から選出した論文を中心に編纂したが、本書はもちろん「沖縄ジェンダー学」という新たな研究領域を形成するプロセスの序章にしか過ぎない。ジェンダー研究のみならず、各分野からのフィードバックを得て、さらに深めていきたい。

#### 目次

#### 序章 沖縄とジェンダー——伝統としての「祈り」

##### I

#### 第1章 男系原理と女性の豊穡

#### 第2章 前近代琉球の家族・夫婦・親子をめぐる権力関係

#### 第3章 琉球芸能における女形

#### 第4章 琉球語彙のこゝろの表現形式にみる女性

#### 第5章 しまくとぅば意識と活動にみられる男女差

##### II

#### 第6章 近代と非近代のあいだ——石牟礼道子のまなざしの射程

#### 第7章 抑圧された記憶の回帰——三取真俊の「魂込め」を読む

##### III

#### 第8章 「沖縄的身体」の所在——舞踏と文学における言葉の接点

#### 補論

#### 補論1 台湾の性意識化と先住民女性の抵抗

#### 補論2 インド女性の伝統と社会運動

### 沖縄におけるジェンダーと制度

また、本年度の重点テーマである「沖縄におけるジェンダーと制度」に関しても、シンポジウムやレクチャーを実施した。

まず11月に米国カリフォルニア在住の宮国訪香子氏を招聘し、本年度レクチャーシリーズ第1回「ハリウッドの女性事情～ヒロイン崇拝と喋らない女達」を一般公開のもと行った。ハリウッドのメディア業界に従事してきた氏の知見から、映画というシステムにおける女性の表象の問題を分析する興味深い講演内容だった。

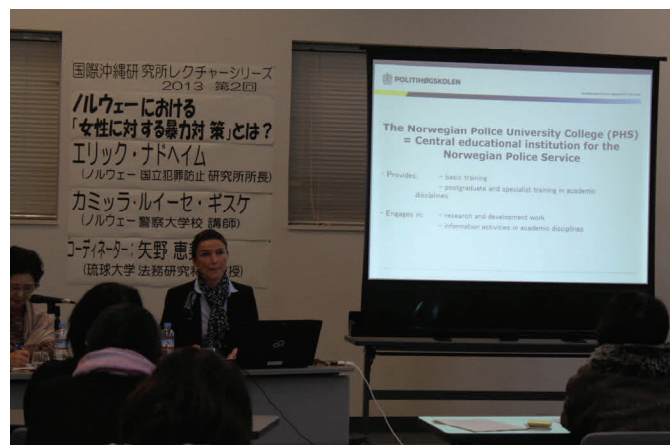
さらに、12月には、IIOS公開シンポジウム「性暴力～これ以上きずつけないうために～」をなは女性センターにて開催した。本プロジェクト研究分担者の矢野恵美准教授のコーディネ



12月に開催されたIIOS公開シンポジウム「性暴力～これ以上きずつけないうために～」

ネートにより、「報道」、「行政」、「医療」、「司法」の分野それぞれから、県内外と海外（スウェーデン）から講師を招聘し、性暴力を未然に防ぐためにはどのような社会的連携が必要かという観点から企画されたシンポジウムであった。「報道」の分野からは、沖縄タイムス社の与那嶺一枝氏、「行政」からは法務省矯正局成人矯正課の宮田祐良氏、「医療」の分野からは、精神科医の竹下小夜子氏、そして、「司法」の分野からは様々な先進的な取り組みで知られるスウェーデンからギータ・ハディング氏を迎え、それぞれの現場の意識や実践の状況などについて語っていただいた。法文学部の森川恭剛教授もコメントの中で述べていたように、DV被害者をはじめ、性被害の事例が多く指摘される沖縄社会において、「ワンストップ支援センター」（仮）設立の機運が高まっている。こうした社会的状況もあり、沖縄の一般の参加者を交え、活発な質疑応答も行われた。

さらに、「女性に対する暴力」を継続的に考える機会として、2月にも、同じく矢野准教授のコーディネートで、ノルウェー性犯罪防止協会会長のエリック・ナドハイム氏とノルウェー警察大学校警視のカミラ・ルイーゼ・ギスケ氏を招聘し、レクチャーシリーズ第2回「ノルウェーにおける『女性に対する暴力対策』とは？」を開催し、本テーマに興味をもつ研究者、弁護士、一般市民など幅広い層の参加者を得た。



2月に開催されたレクチャーシリーズ第2回「ノルウェーにおける『女性に対する暴力対策』とは？」

## 「中期計画プロジェクト」 文理融合型研究を目ざした 実践的研究プロジェクト

### 先端のかつ新たな研究領域の開拓

一昨年度(2011、平成23)から本年度までの3年間にわたるプロジェクトを実施してきた。過去のプロジェクトのテーマは各年度でやや異なるものの、共通しているのは複数の研究分野にまたがった共同研究および融合研究の推進という点にある。

本年度(2013)の本プロジェクトの目的は、琉球・沖縄学研究において旧来、主流であった人文・社会科学系の研究方法に、理系の知見をより一層取り入れた文理融合型研究の推進によって、先端のかつ新たな研究領域の開拓を目ざしたものである。本年度の研究計画は次の通りとした。

第一に、旧来の人文・社会科学分野の琉球・沖縄学の批判的検証を行い、新たな学問体系へ結びつける。

第二に、人文社会系と自然系研究の協同研究を実施する。第一線の研究者による先端テーマについて、若手研究者との共同研究を行う。

具体的な研究テーマとして、次のものを計画した。

- a: 生業、コモンズ論(共有資源)の研究について。海浜や山林等の共有・共同利用、自然－人間系領域の研究分野である。
- b: 自然認識の言語・文化研究について。自然環境と社会について言語学、歴史学、地理学等との関連からの研究領域である。
- c: 生存戦略と琉球列島の自然環境に関する研究について。主に、農学・農業などの分野と歴史・文化研究との共同研究についてである。
- d: 絵図・図像等の自然描写に見る琉球文化研究について。
- e: 自然環境と環境問題、疾病・医療等に関する研究について。

### 研究会・シンポジウムの成果

以上の課題を設定して取り組み、実現したものは次の通りである。

①2013年9月27日(金)には、琉球大学国際沖縄研究所の中期計画プロジェクトと連携し、「第一回自然誌＝環境史研究会」を琉大国際沖縄研究所会議室(文系総合棟6F)で開催した。研究報告は、豊見山和行氏「首里王府のソテツ政策」である。

②11月30日(土)には、「文理融合型の新しい琉球学を目指して－若手研究者との対話から」(琉球大学50周年記念館)で開催した。話題提供者として、波利井佐紀氏(琉大熱帯生物研究センター)「サンゴと藻類の共生のはじまり」、神谷智昭氏(琉大法文学部)「韓国における犬肉食につい

て」、佐々木健志氏(琉大資料館(風樹館))「沖縄の希少昆虫類の保全学」、萩原左人氏(琉大法文学部)「寄り物とシマ社会」の四報告をもとに、活発な討議が行われた。

③12月1日(日)には、沖縄県立博物館・美術館2F講堂において、公開シンポジウム「琉球列島の自然・文化・環境－人文学と自然学の対話」を開催した。山田孝子氏(京都大学名誉教授)「八重山諸島における人々の自然認識：人－植物関係にみる地域性と共通性」、堀信行氏(奈良大学文学部教授)「沖縄・奄美地方における大地に関わる自然認識と循環思想：土と石のイメージと「ゆいむん」の思考をめぐる」の二つの講演をもとに、次の三つの関連発表が行われた。仲間勇栄氏(琉大農学部)「沖縄の御嶽林をどうとらえるか：植生・歴史・文化の視点から」、土屋誠氏(琉大理学部)「サンゴ礁の縁結び：生態系ネットワークと多分野の融合」。全体の討議は、狩俣繁久氏(琉大法文学部、IIOS副所長)の司会のもと、有意義なものとなった。

### 今後の研究課題

上記の研究会やシンポジウム以外に人文学と自然環境に関わる資料の収集も行った。具体的には、①明治期の「国頭郡今帰仁間切各村全図および字図」等(今帰仁村歴史文化センター蔵)の地籍図に関する撮影、②明治期、奄美諸島の土地情報を記載した「明治12年竿次帳」の中から奄美大島・沖永良部島等に関するデータをエクセルへ入力した。予算との兼ね合いから全データの inputs は果たせなかったが、残りのデータについては今後、何らかのプロジェクトによって inputs の継続が必要とされる。

なお、本年度のプロジェクトに関連して、狩俣繁久氏、渡久地健氏(本学法文学部)、高橋そよ氏(本学うない研究者支援センター)等によって自然と文化研究との融合を目指した実践的な臨地調査も実施された。IIOSの中期計画において重要かつより一層、展開すべき研究領域として、次年度以降にも継続されることを期待したい。



12月に開催された公開シンポジウム「琉球列島の自然・文化・環境－人文学と自然学の対話」



## 「危機言語研究プロジェクト」 危機的状況と復興・再活性化に 向けた取り組み

危機言語研究プロジェクトチームでは、文化庁国語の委託を受け、日本における危機言語・方言に関する調査（「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）」）を実施し、各方言の危機的状況と復興・再活性化に向けた取り組みに関する調査を行った。調査には当研究所、法文学部、教育学部の教員（常勤・非常勤）に加え、国立国語研究所、千葉大学、大分大学の研究者・教員が参加した。また、人文社会科学研究科博士後期課程の学生2名も参加した。調査は、各方言から特定の地域を選び、その地域における方言の特徴を調べ、ユネスコの基準（2003年版）に基づく危機度の判定を行った。また、方言復興に取り組む団体・個人に聞き取りをし、方言復興の課題等について分析した。さらに関連する文献資料の調査も行った。なお、本事業の報告書は文化庁のホームページ（[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_sisaku/kikigengo/index.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/kokugo_sisaku/kikigengo/index.html)）から入手することができる。

### 文化庁委託事業報告書

危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究  
（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）

2014年3月

琉球大学  
国際沖縄研究所

## 2013年度出版物

### 国際沖縄研究所ライブラリ創設

2009年、琉球大学国際沖縄研究所（IIOS）は、沖縄および沖縄と関連の深い地域に関する国際的・学際的研究を推進する拠点として設置された。そして、その研究成果を社会に発信する方法の一つとして叢書「国際沖縄研究所ライブラリ」をスタートさせることとなった。IIOSは、総合大学が有する豊富な人的資源を基礎基盤として、人文・社会科学分野を中心に、理学・工学・医学等関連する諸分野との連携に基づいた学際的研究に取り組んでおり、同時に、歴史的に育まれてきた沖縄の国際性を活かし、世界各国・各地域の研究機関や研究者との学術的連携の拡充に努めている。このような学術的取り組みを通して、様々な分野の専門家、様々な地域の実践者との共同研究の成果を蓄積し続けている。そしてこの知的ストックが、地域社会に内在する問題を解決し、地

域資源の向上を図り、グローバル社会の中で地域の主体性を確立するための礎となるよう、IIOSではそれぞれの地域社会に根ざした研究を幅広く展開している。

琉球大学は、教育・研究を通して地域や国際社会に貢献する「知の津梁（架け橋）」を目指している。「国際沖縄研究所ライブラリ」から出版する書籍の1冊1冊は、IIOSと社会を結ぶ架け橋であり、沖縄から世界へ、より強く美しい橋を1本でも多く架けることを目標に据え、この叢書を刊行する。

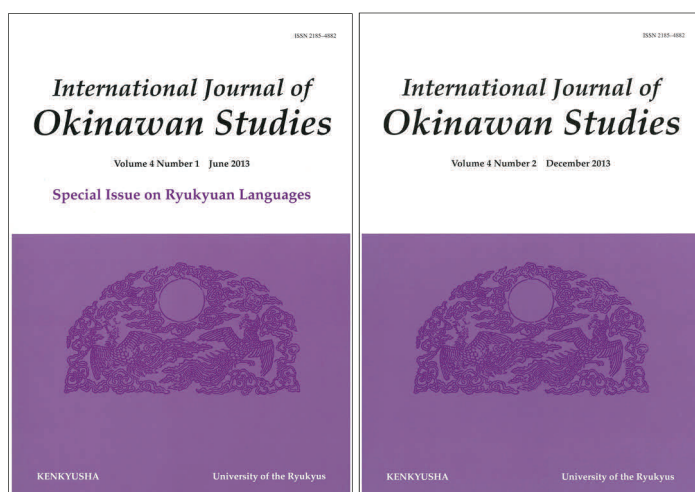
本年度は新しい島嶼学の創設プロジェクトから『島嶼地域の新たな展望 自然・文化・社会の融合体としての島々』、沖縄ジェンダー学の創出プロジェクトからは『沖縄ジェンダー学・第1巻、「伝統」へのアプローチ』を刊行した。



「国際沖縄研究所ライブラリ」第1巻

## 2013年度研究成果＜論文集＞

当研究所では、国際学術誌、*IJOS: International Journal of Okinawan Studies*を発行し、沖縄および沖縄に関連する地域の人文科学、社会科学、自然科学等の分野の論文を公募し、査読を経たうえで掲載している。今回発行した7号は「琉球語」に関する特集号、8号は島嶼研究、法律、歴史地理学、コミュニティ心理学等さまざまな分野の論文を収録している。



Volume 4 Number 1 June 2013  
(通巻7号)

### *IJOS: International Journal of Okinawan Studies*

Special Issue on Ryukyuan Languages

Guest Editor: Masayoshi Shibatani (Rice University)

Foreword Masayoshi Shibatani 1

#### Papers

|                                                                                                                      |                                     |     |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|-----|
| The Central High Vowels in Ryukyuan Languages:<br>A Comparative Palatographic Study of Yuwan Amami and Tarama Miyako | Hayato Aoi, Yuto Niinaga            | 3   |
| Geographical Distribution of Mimetics in Amami-Okinoerabu Island                                                     | Akiko Tokunaga                      | 13  |
| Surface Position and Focus Domain of the Ryukyuan Focus Particle <i>du</i> :<br>Evidence from Miyara Yaeyaman        | Christopher Davis                   | 29  |
| Clitics in Irabu Ryukyuan                                                                                            | Michinori Shimoji                   | 51  |
| The Representative, Negative, Past, and Continuative Forms of Miyako Verbs                                           | Shigehisa Karimata                  | 81  |
| Amami Nominalizations                                                                                                | Masayoshi Shibatani, Hiromi Shigeno | 107 |

#### Book Reviews

|                                                                                                   |                   |     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|-----|
| Shinji Ogawa. <i>Nakijin-hōgen-akusento-no shosō</i><br>[Aspects of Nakijin Dialect Accentuation] | Wayne P. Lawrence | 141 |
| 高橋俊三著『琉球王国時代の初等教育』                                                                                | 石崎博志              | 147 |

Editor's Note on Special Issue Ikue Kina 153

Contributors 155

Submission Guidelines 157

投稿規定 158

Volume 4 Number 2 December 2013  
(通巻8号)

### *IJOS: International Journal of Okinawan Studies*

#### Papers/論文

|                                                                                                                                                                                                      |                     |    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|----|
| Island Studies: Some Critical Reflections                                                                                                                                                            | Godfrey Baldacchino | 1  |
| Okinawa's Citizen Judge Panels vs. U.S. Military Hegemony:<br>WikiLeaks' Secret U.S. Cable Document on the Lay Adjudication of<br>American Soldier Criminal Cases in Japan's <i>Saiban-in</i> Trials | Hiroshi Fukurai     | 13 |
| 正保琉球国絵図に描写された奄美・沖縄のサンゴ礁と港                                                                                                                                                                            | 渡久地 健・目崎 茂和         | 31 |
| 格差型ジレンマ構造における地域住民の責任帰属認知と環境配慮行動の関連:<br>沖縄県の赤土流出問題をめぐるステークホルダー間の比較                                                                                                                                    | 加藤 潤三・野波 寛          | 47 |

#### New Research Trends/研究動向

|                                                                                                |                |    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|----|
| Okinawan Studies at the University of Hawai'i: Twice Born;<br>Suggestions for Further Research | Robert N. Huey | 65 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|----|

#### Book Reviews/書評

|                                                     |       |    |
|-----------------------------------------------------|-------|----|
| スーザン・ブーレイ著<br>『目取真俊の世界(オキナワ)―歴史・記憶・物語』              | 小嶋 洋輔 | 79 |
| イチロー・カワチ、等々力英美編<br>『ソーシャル・キャピタルと地域の力: 沖縄から考える健康と長寿』 | 山城 新  | 84 |

Submission Guidelines 89

投稿規定 90

紀要『国際琉球沖縄論集』は、当研究所の所員および研究員などの研究成果の発表の場として、同時に質の高い内容をともなった研究となるような成果の公表に寄与するために発行されている。3号は地理学、言語学の論文等を収録している。

ISSN 2186-7933

## 国際琉球沖縄論集

第3号

2014. 3.

#### 【研究論文】

水の流出からみた沖縄島における新旧石灰岩地域の溶食速度に関する一考察  
廣瀬 孝・大城 和也 (1)

首里方言における受動文の意味構造とベネファクティブ 當山 奈那 (11)

Theoretical Perspectives and Preliminary Results on the Feasibility of Using  
Uchinaaguchi in Okinawan Karate and Kobudo Classes Samantha May (27)

#### 【研究ノート】

アメリカ占領期の沖縄における社会福祉―USCAR 婦人クラブを中心に―  
向井 洋子 (51)

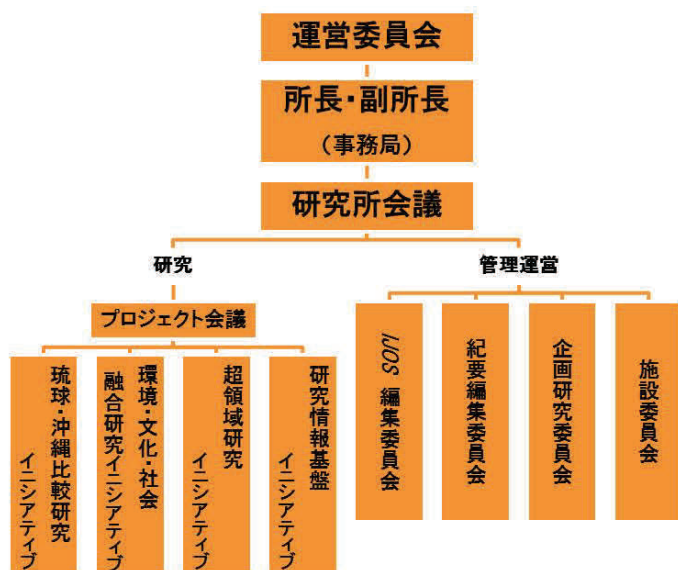
#### 【翻訳】

ルイ・テオドル・フューレの手紙―フランス人宣教師のみた1850年代の琉球―  
宮里 厚子 (67)

#### 【資料】

日本の地理学における島嶼研究論文 宮内 久光 (79)

## 2013年度 国際沖縄研究所 組織図



## 運営委員会委員一覧

|      |     | 氏名     | 所属部局    | 職名        |
|------|-----|--------|---------|-----------|
| 1号委員 | 委員長 | 藤田 陽子  | 国際沖縄研究所 | 研究所長(併任)  |
| 2号委員 |     | 狩俣 繁久  | 国際沖縄研究所 | 副研究所長(併任) |
| 3号委員 |     | 喜納 育江  | 国際沖縄研究所 | 専任教員・教授   |
| 4号委員 |     | 宮平 勝行  | 法文学部    | 教授        |
| "    |     | 里井 洋一  | 教育学部    | 教授        |
| "    |     | 小高 一則  | 理学部     | 教授        |
| "    |     | 大嶺 ふじ子 | 医学部     | 教授        |
| "    |     | 屋我 実   | 工学部     | 教授        |
| "    |     | 仲間 勇栄  | 農学部     | 教授        |

## I/OIS 編集委員会

|      | 氏名            | 所属部局    | 職名   |
|------|---------------|---------|------|
| 編集長  | 喜納 育江         | 国際沖縄研究所 | 教授   |
| 編集委員 | 狩俣 繁久         | 法文学部    | 教授   |
| "    | Timothy Kelly | 外国語センター | 特命教授 |
| "    | 山城 新          | 法文学部    | 准教授  |

## 紀要編集委員会

|      | 氏名    | 所属部局     | 職名  |
|------|-------|----------|-----|
| 編集長  | 宮内 久光 | 法文学部     | 教授  |
| 編集委員 | 瀬口 浩一 | 法文学部     | 准教授 |
| "    | 矢野 恵美 | 大学院法務研究科 | 准教授 |

## 併任教員リスト

|             | 氏名                 | 所属部局     | 職名   | 専門                  |
|-------------|--------------------|----------|------|---------------------|
| 所長<br>(専任)  | 藤田 陽子              | 国際沖縄研究所  | 教授   | 環境経済学               |
| 副所長<br>(併任) | 狩俣 繁久              | 法文学部     | 教授   | 言語学・日本語学・<br>琉球語学   |
| 専任          | 喜納 育江              | 国際沖縄研究所  | 教授   | アメリカ文学・<br>ジェンダー研究  |
| 併任          | 赤嶺 政信              | 法文学部     | 教授   | 民俗学・<br>文化人類学       |
| 併任          | 赤嶺 守               | 法文学部     | 教授   | 中琉関係史               |
| 併任          | 池田 栄史              | 法文学部     | 教授   | 考古学                 |
| 併任          | 石原 昌英              | 法文学部     | 教授   | 言語政策・<br>社会言語学      |
| 併任          | 大島 順子              | 観光産業科学部  | 准教授  | 環境教育・ESD            |
| 併任          | 大城 学               | 法文学部     | 教授   | 琉球芸能                |
| 併任          | 大湾 知子              | 医学部      | 准教授  | 成人看護学 I             |
| 併任          | 瀬口 浩一              | 法文学部     | 准教授  | 財政学・<br>地域・都市経済     |
| 併任          | 我部 政明              | 法文学部     | 教授   | 国際関係論               |
| 併任          | 漢那 洋子              | 理学部      | 准教授  | 光化学・有機物理化学・<br>科学教育 |
| 併任          | 金城 宏幸              | 法文学部     | 教授   | 外国語教育・<br>言語社会学     |
| 併任          | Kelly Timothy Hove | 外国語センター  | 特命教授 | 言語学                 |
| 併任          | 越野 泰成              | 法文学部     | 教授   | 理論経済学・<br>法と経済学     |
| 併任          | 白井 こころ             | 法文学部     | 准教授  | 公衆衛生学・<br>老年学       |
| 併任          | 鈴木 規之              | 法文学部     | 教授   | 国際社会学               |
| 併任          | 高良 鉄美              | 大学院法務研究科 | 教授   | 憲法学・比較憲法学           |
| 併任          | 渡久地 健              | 法文学部     | 准教授  | 生態地理学・<br>サンゴ礁文化論   |
| 併任          | 等々力 英美             | 大学院医学研究科 | 准教授  | 疫学・公衆衛生学            |
| 併任          | 豊見山 和行             | 教育学部     | 教授   | 琉球史・アジア海域史          |
| 併任          | 野入 直美              | 法文学部     | 准教授  | 多文化教育・<br>ライフヒストリー  |
| 併任          | 廣瀬 孝               | 法文学部     | 准教授  | 自然地理学・<br>水文地理学     |
| 併任          | 古川 卓               | 保健管理センター | 教授   | 臨床心理学               |
| 併任          | 前門 晃               | 法文学部     | 教授   | 地形学・自然地理学・<br>岩石制約論 |
| 併任          | 町田 宗博              | 法文学部     | 教授   | 人文地理学               |
| 併任          | 宮内 久光              | 法文学部     | 教授   | 人文地理学・<br>島嶼の地理学    |
| 併任          | 本村 真               | 法文学部     | 准教授  | 児童福祉・<br>トラウマ理論     |
| 併任          | 矢野 恵美              | 大学院法務研究科 | 准教授  | 刑事法・被害者学・<br>北欧法    |
| 併任          | 山城 新               | 法文学部     | 准教授  | アメリカ文学・<br>環境思想史    |



## 国際沖縄研究所規則および規定

### 琉球大学国際沖縄研究所規則

〔平成21年4月1日 制定〕

#### （趣旨）

第1条 この規則は、琉球大学学則第5条の3第2項の規定に基づき、琉球大学国際沖縄研究所（以下「研究所」という。）に関し、必要な事項を定める。

#### （目的）

第2条 研究所は、沖縄及び沖縄に関連する分野の研究と研究プロジェクトを推進し、国際的な研究拠点として、沖縄に関する相互理解に貢献することを目的とする。

#### （業務）

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる業務を行う。  
(1) 共同研究プロジェクトの企画・立案及び推進に関すること。  
(2) 国際的、総合的、学際的及び文理融合型の研究プロジェクトの推進に関すること。  
(3) 社会連携、社会貢献に関する研究プロジェクトの推進に関すること。  
(4) 国内外の研究機関等との共同研究及び研究交流の推進に関すること。  
(5) その他研究所の目的を達成するための必要な業務  
2 前項の研究プロジェクトは、学問的、社会的、地域的な必要性に応じて、不断に見直しを行う。

#### （職員）

第4条 研究所に次の職員を置く。

- (1) 研究所長
  - (2) 副研究所長
  - (3) 研究所の専任教員
  - (4) その他必要な職員
- 2 前項に掲げる者のほか、研究所に客員研究員及び協力研究員（外国人を含む。）を置くことができる。

#### （研究所長及び副研究所長）

第5条 研究所長は、研究所の業務を掌理する。  
2 研究所長は、「施設等の長の選考に関する申合せ」（平成18年2月20日役員会決定）に基づき、学長が指名する。  
3 副研究所長は、研究所長を補佐する。  
4 副研究所長は、本学の教授又は准教授のうちから研究所長の推薦に基づき学長が任命する。  
5 研究所長及び副研究所長の任期は、2年とし、再任を妨げない。  
6 研究所長が欠けたときは、次の研究所長が任命されるまで、副研究所長が代行する。

#### （運営委員会）

第6条 研究所に、研究所の管理運営に関する重要事項を審議するため、研究所運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。  
2 運営委員会の組織及び運営については、別に定める。

#### （併任教員）

第7条 研究所は、第3条の業務を行うため併任教員を置くことができる。  
2 併任教員は、本学の教授、准教授又は講師のうちから研究所長の推薦に基づき学長が任命する。  
3 併任教員の任期は、任命された日から当該年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

#### （研究所会議）

第8条 研究所に、専門的な研究事項を協議するため、研究所会議を置く。  
2 研究所会議の組織及び運営については、別に定める。

#### （庶務）

第9条 研究所の庶務は、学術国際部研究協力課において処理する。

#### （雑則）

第10条 この規則に定めるもののほか、研究所の運営に関し必要な事項は、学長の承認を得て、研究所長が別に定める。

#### （改廃）

第11条 この規則の改廃は、教育研究評議会の議を経て学長が行う。

#### 附 則

1 この規則は、平成21年4月1日から施行する。  
2 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター規則（平成14年1月22日制定）、琉球大学アメリカ研究センター規則（平成14年10月22日制定）、琉球大学移民研究センター規則（平成15年11月4日制定）琉球大学法文学部附属アジア研究施設規程（平成6年1月19日制定）は、廃止する。  
附 則（平成23年4月26日）  
1 この規則は、平成23年4月26日から施行し、平成23年4月1日から適用する。  
2 この規則の施行日前に、現に併任教員である者及び改正後の第7条第2項の規定により最初に任命された併任教員の任期は、改正後の第7条第3項の規定にかかわらず、平成24年3月31日までとする。  
附 則（平成24年6月26日）  
この規則は、平成24年7月1日から施行する。  
附 則（平成25年3月26日）  
この規則は、平成25年4月1日から施行する。

### 琉球大学国際沖縄研究所運営委員会規程

〔平成21年4月1日制定〕

#### （趣旨）

第1条 この規程は、琉球大学国際沖縄研究所（以下「研究所」という。）規則第6条第2項の規定に基づき、琉球大学国際沖縄研究所運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

#### （審議事項）

第2条 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。  
研究所の管理運営に関すること。  
研究所の事業計画に関すること。  
研究所の教員人事（教員選考に係る部分を除く。）に関すること。  
その他研究所に関する事項

#### （組織）

第3条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。  
研究所長  
副研究所長  
研究所の専任教員  
各学部（ただし、観光産業科学部は除く。）から選出された教員各1人  
学外の学識経験者のうちから研究所長の推薦に基づき学長が委嘱する者若干人  
2 前項第5号の委員は、学長が任命する。

#### （任期）

第4条 前条第1項第4号及び第5号に規定する委員の任期は2年とし、再任を妨げない。  
2 前項の委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### （委員長）

第5条 運営委員会に委員長を置き、第3条第1項第1号に規定する委員をもって充てる。  
2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。  
3 委員長に事故があるとき又は欠けたときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代行する。

#### （会議）

第6条 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。  
2 議決を要する事項については、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

#### （意見の聴取）

第7条 運営委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

#### （専門委員会）

第8条 運営委員会に、専門事項を審議するため、専門委員会を置くことができる。

#### （庶務）

第9条 運営委員会の庶務は、学術国際部研究協力課において処理する。

#### （雑則）

第10条 この規程に定めるもののほか、運営委員会に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て研究所長が別に定める。

#### （改廃）

第11条 この規程の改廃は、運営委員会の議を経て学長が行う。

#### 附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。  
附 則 （平成23年3月29日）  
1 この規程は、平成23年3月29日から施行し、平成23年4月1日から適用する。  
2 この規程の施行日前に、運営委員会規程第3条第1項の規定に基づき任命された委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

*International Institute for Okinawan Studies*  
**琉球大学 国際沖縄研究所**

Address: 1 Senbaru, Nishihara, Okinwa 903-0213 JAPAN

住所: 〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地

TEL: 098-895-8475 FAX: 098-895-8308

E-mail: iios@w3.u-ryukyu.ac.jp

http://www.iios.u-ryukyu.ac.jp